

平成30年2月6日(火)

老球の細道390号

## ミニ、ジュニア世代の指導について

会津バスケットボール協会 室井 富仁

バスケットボールのコーチをしていて何が残念かというと、ミニバスケット、中学校で栄光をつかんでしまったトップアスリートが、その後、高校、または大学などでリタイアしたり、人生の正道からドロップアウトしてしまうことである。本来なら人生の中で乗り越えなければならないさまざまな葛藤の克服を、バスケットボールを通して学んでいるはずだから、リタイアとかドロップアウトということは考えにくいことなのだが。(補足：小学、中学はスーパースター、しかしその後は普通のプレーヤーで静かに競技人生をまっとうする。このパターンも寂しすぎる)

スポーツは心技体の向上のみならずライフスキルの習得にも絶好のツールだから、トップアスリートは人間的にも傑出した存在であってほしい。しかし、現実的にはジュニアのトップアスリートたちは、自分の競技に秀でていても、精神的、社会的な発達が未熟で、多面的な発達がなされないままであることが多い。そこに周囲のチャホヤが加われば、その後の人生は推して知るべしだろう。

では、ミニ、ジュニア期の子どもにはどのようなスポーツ指導が求められているのか。早稲田大学スポーツ倫理専門の友添秀則教授は次のように語っている。

【ジュニア時代は、技術のある指導者のもと、自由な雰囲気の中で多くの種類のスポーツ経験を重ねる。特に、その競技が得意な子とそうでない子が入り交じった集団に入れて、コミュニケーションスキルを身につけさせること。そして、勉強への努力の大切さを学びながら、将来のスポーツ以外での基礎を身につけることが、その子どものセカンドキャリアにも好影響を与える】日本体育協会発行『スポーツジャパン』(2013特別号)

また、友添秀則教授は、指導者はジュニア世代にフェアプレーとスポーツパーソンシップを教えていかなければならないという。ちなみに、スポーツパーソンシップとは、長い人生を勇氣と正義を持って生き抜くための美德を意味する。これらのことを教えるためには次の三つのことが必要であると説いている。

まず、良い指導には勢いがあり、子どもたちの練習活動によどみがない。ある技術の課題に向かってテンポよく練習が進んでいくため、時間は短時間で十分である。

次に、具体的な行動目標を設定することが大切である。練習内容も具体化させ、わかりやすい練習教材(ドリル)を選ぶことが重要。子どもたちをとにかく飽きさせない。

最後に、良いスポーツ指導は雰囲気がいいものである。明るく温かな雰囲気、指導者と子どもとの間に肯定的な相互作用がある。「ダメだ!」「何やっているんだ!」などという否定的な言葉は、この雰囲気の中にはありえない。以上。

もう一度コーチをするチャンスがめぐってきたら、目の前の勝利や結果のみに一喜一憂するのではなく、子どもの将来の多面的な伸びしろにこだわりを持った指導をしたい。トップアスリートになりえた子にはさらに上の世界を見させてやり、普通だった子には隠された才能を引き出して自信をつけさせてやる。引退してセカンドキャリアに進む子にはバスケットボールで培ったライフスキルでその道の第一人者になってもらう。

コーチを天職とする者にとって、ダイヤモンドの原石を磨く楽しみは快樂である。